

三ヶ島葎子令和の百首選 新たに選ばれた七十三首

あたらしき年の始ともろともにあたらしきこと学ぶうれしき
たへがたくものなつかしき夕ぐれよわが櫛をさへ手にとりて見る
女居いかにて楮かみさらせり白梅の咲くと見下ろす谷の流れに
筏組いかだむ木の音冴えて水ませるあさけのたにに鶯の鳴く
落との臺手とにたくはへて谷川の石ふみゆけば山がらのなく
灰色の大き玉抱き三日月の沈むと見ゆるさびしき光
われさびし青き李の花に似て弥生の空のもとに悩める
われの来し道はみにくし魚の行く後ろの如くさざ波となれ
挟みみたる羽をとほしてわが指と指みやくに脉みやくをば打つあきつかな
如何ばかり我を知るやと問はまほし褒むる人にも謗る人にも
麦藁の流るる如く木の流れ松明ぬれて水の増す音
ひろがりてすべなき我の恋に似ぬ蜻蛉の触れて渦を描く水
みづからを偽るよりも苦しかりありのままなる我を語るは
新しき女ぞ夢の女ぞといつの日待ちて我をとなへん
あらたまるこのさびしきよ君とある日こそひとり心地するなれ
逢ふところ道のかたへも草原もわれら世界のただなかとせむ
いざなひに来しとも知らずほほゑみぬ亡き啄木と夢に語りて
家のうち鍋などさげてゆきかへるゆふぐれにきく秋雨の音
わが子ともまだおぼえねどしほれたる花のここち_こにいたはりて抱く

樹は立てり立ちすくみたるわがごとくはたみなぎれるいのちのごとく
爪立てて我をつかめる手の力ゆるぶが如し子の眠りつく

鈴ふればその鈴の音を食はむとするにやあはれわが子口あく
われいまだ道の半ばと思ふとき思ふことみなはかなくなりぬ

子のためにただ子のためにある母と知らば子もまた寂しかるらん
柔かき眉を重ねて栗の花小雨のなかにゑめる初夏

蜂のゆく朝くらがりの庭にして爪紅の花赤しも白しも

もの縫へるわがかたはらに紙切りてしばしおとなし日にやけし子は
露店の上二つ吊せる提灯の一つは消えをり草の香深く

飛行場の出来て変れる所沢この道のところわが家なりし
よく遊び疲れたる子は眠りたり生れしその日もこの顔なりし

我が家の梁に吊せる鱒の塩溶けてしたたり板間をぬらす
俵屋の足暑からん炎天の日の照りさかる深き埃に

二階ある家にうつりて久しぶり夕べの雲の動くを見たり
山越えて友をたづぬる初春の真昼の空に富士あらはれぬ

雪ふれば何かうれしくおのづから足ぶみをして唱歌をうたふ
いつまでももの学びたきに卒業の日は近づきぬ三月きたりて

夕やけの空すでに暗しひらひらと頭の上を蝙蝠の飛ぶ

夕餉あとの火鉢の火をば消して立ちぬ我や寂しく生きざるべからず
いつまでも水浴びやめず弟はくちびるの色むらさきなるに

わが叔母が機織る軒に枝垂れて柿の実赤く色づきにけり
うすべにの山茶花咲けり始業時間おそくなりたる学校の庭に
つみなほす舅の風呂敷けさ見れば牛引く太き綱をつつめり
引越の荷物いだして部屋ひろし本棚のあと畳に残る

わが庭の桜は夜目にほの白し訪ひこし友を送りいづれば

今は何も言ふことえずと友は泣きぬ今宵別れていつまた逢はん

はなむけに友がくれしはわがつねにほしと言ひける海老色りぼん

亀井戸の藤の花見にゆく人の赤き傘見ゆ畑の向ひに

咲きたわむ白百合の花さやりけん花粉つきたり白地の袖に

明日の朝幾つ咲くべき朝顔の蕾ふくらみ夕となりぬ

秋風は空より吹きて心地よし散りしける柿の落葉の紅る

縁側に吾子とならびて朝露に濡れたるばらの花を見にけり

藤の花さくべくなりぬ見あぐれば藤棚こめて煙るむらさき

わが夫と心へだてるさびしさを耐^{しの}へて今宵父の死を守る

久し振の星空うつくし夏深み天の川さへ白く見えつつ

空はれて遠き山見ゆ秋風に吹かれつつゆく友とわれかな

やや遠き我をいたはりわかれ路に立ちつつ友は涙ぐみをりき

色づきし森の梢を声もなくはなれてゆきし一羽の鳥

燃ゆる火を見つつすべなし運びこし蒲団によりてしばらくねむる

往来に馬をとどめて荷を下ろす人の汗にはふ家の中まで

夕立の雨なごりなく晴れわたり星のすがしき夜ぞらとなれり
思ひきり花^{はな}瓣^{びら}そらし白百合はカーぱいの匂ひを吐くも
ポストまで行きがたくして幾たびも一つの手紙持ちかへるなり
一つ鳴けばまた一つ鳴き夕暮るる空にひととき鳴き交ふひぐらし
春の雨夜半に降りいでわが屋根に音あたたかくふりそそぎをり
命せまりて蟬の叫びしこの夜半を秋雨しづかに降りいでにけり
久々に来りし吾子はおほ父に言はれてわれの床近くすわる
置時計今宵とまりたり先の日に来りし吾子が巻きしままなる
きその夜の苦しみ思ひしみじみと今日ある命ありがたく思ふ
いささかの仕事なれどもこの弱きわれには深き覚悟要るなり
いきどほり堪へがたき時ゆくりなく外の面に照れる月を思ひぬ
さかりゐる一人の吾子を思ひつつ眼つぶりて飯かきこみぬ
この朝も遠き汽笛を床にして聞きてゐるなり鳴り終るまで
夜の更けの凍^い土^てをゆく下駄の音銭湯へゆく人人ならん

選者 ・ 市民（一般・市内小中学校児童生徒）

・ 新版三ヶ島葎子全歌集刊行委員（秋山佐和子・久保田登・さいとうなおこ・脇晴代）